

シューベルトのピアノ作品

4つの即興曲 D899 より 第1番

それぞれ4曲からなる2つの即興曲集(D899とD935)は、シューベルトの死の前年、1827年の作。D899は最初の2曲が、1827年12月にハスリングーによって出版された(残り2曲の出版は1857年)。「即興曲」という名称はハスリングーの命名だが、シューベルトも気に入っていたという。「第1番 ハ短調」は、どこかもの悲しさを感じさせる冒頭の素朴な主題が、様々な味付けで自由に変奏され、コーダは同主調のハ長調となって、静かに終わる。

楽興の時 D780

全6曲からなる《楽興の時》の作曲年代は定かではないが、1823～28年の間に書かれたと推定されている。出版は1828年。第1番は三部形式。装飾音のついた素朴な旋律で始められる。中間部では3連符が小川のように穏やかに流れ、冒頭を再現して終わる。第2番はロンド形式。落ち着いた変イ長調の主題と、対照的な嬰ハ短調のエピソードが強い印象を残す。第3番は、短いながらも広く知られた曲で、ロシア風のメロディには誰しも耳馴染みがあるだろう。第4番は三部形式。右手の無窮動風の動きを低音部がスタッカートで8分音符で支える。中間部のシンコペーションで気分が優しくほどける。第5番は三部形式で、行進曲風の強い打鍵で始まるが、中間部では目まぐるしく転調して、即興性を感じさせる。第6番は三部形式。コラル風の重厚な和声進行のなかで、シューベルトならではの転調が頻繁にさり気なく行なわれ、その自在さに驚かされる。

ピアノ・ソナタ 第21番

1828年9月シューベルトの死のわずか2ヵ月前に作曲された、生涯最後のピアノ・ソナタ。第1楽章モルト・モデラートは、優しく親しみやすい第1主題で歩み出し、くぐもるようなトリルの後、変ト長調の印象的なテーマが浮かび上がってくる。続いて穏やかな第2主題が始まり、自由な転調を経てハ長調のコデッタ(小結尾)に至るが、牧歌的な平穏を断ち切るように低音のトリルが現れ、提示部が静かな力強さで反復される。展開部は嬰ハ短調で開始され、複雑な転調をともなって現れる様々な音型が陰影に満ちた幻想的な世界を形づくる。第2楽章のアンダンテ・ソステヌートは、穏やかな抒情に彩られており、中間部では明るく暖かな響きを聴くことができる。第3楽章スケルツォは、快活なテンポで優美な主題を奏でながら、トリオでは一転して変ロ短調に転じる。第4楽章アレグロ・マ・ノン・トロポは、提示部を繰り返さないソナタ形式で、冒頭および随所で強奏されるG音が耳に残る。途中、少々性急なテンポを保って複雑な転調を重ねながら、最後はプレストで短く締めくくる。長きにわたる模索を経てシューベルト固有の様式というべきものが結晶化した本作は、彼の全ピアノ・ソナタにおける最高傑作と言えよう。